

《後世に残すことがあるので、もう少し生きていたい》-吉田所長の言葉

「心からの謝罪でなければ謝らないほうがよい」とはいえるが、外部からの圧力が高まると同時に自分たちのミスリードにも否応なしに気づかざるをえなかったであろうことが、《関係者の方々》へのおわびという文言にあらわれているようにみえるが、しかし、原発所員や故吉田昌郎元所長への「心からの謝罪」からははるかに遠いことは明白である。もし朝日に彼らに対する「心からの謝罪」をはっきりと示そうとする態度があるなら、原発所員たちに対しては直接出向く必要があるし、故吉田元所長に対しては仏前で謝罪しなければならない。もちろん、それで謝罪は完了したことにはならず、「心からの謝罪」を行うには、まず彼らに謝罪の言葉が届くことを第一歩としなければならないということである。

9. 12産経には原発元所員や作業員の声が次のように掲載されている。

《東京電力広報部は11日、「吉田調書は内閣官房で管理されているものであり、政府の公開に対し当社としてコメントできる立場にない」とした上で、朝日新聞の報道については、「退避先を（福島）第2原発としたことは、『吉田氏の指示に違反したものととは考えていない』というのが当社の主張であるが、朝日の対応についてもコメントできない」とした。

東電関係者によると、朝日が5月20日付朝刊で「命令違反」と報道したとき、当時現場にいた福島第1原発の元所員から「何だこれは」と怒りの声が広がった。特に吉田昌郎氏の遺族の心労が大きく、「（吉田氏の）言っていた、思っていたことと正反対のことを意図的に書かれた」と涙を流したという。

産経新聞の取材に応じた40代の元所員は「朝日新聞の報道はどうかしていた。こんなことになり、親方（吉田氏）が生きていたら悔しくてたまらなかったと思う」と憤っていた。

吉田調書の公開については、東電社内で「公開すべきではなかったのでは」との声も聞かれる。

東電社員の一人は「率直に語ったことが意図せず公開されるとなると、原発に限らず今後同じような事故があったときに、関係者が口をつぐんでしまって原因調査が妨げられる恐れがある」と話した。《「普通の人が逃げるところに俺たちは行ったんだよ？ そんな連中が吉田昌郎所長の命令に違反して逃げるわけがない。朝日新聞の報道は当初から誤報だと思って黙殺していた」

福島第1原発の収束作業に従事し続けた東電協力会社の30代社員は、吉田調書の公開を受けて振り返る。

2号機圧力抑制室の圧力がゼロになった後も原発に残った作業員約50人を海外メディアが「フクシマ・フィフティーズ（福島の50人）」と報道。その後収束に入った作業員もいつしか含まれるようになった。男性はその一人だ。

平成23年3月11日の震災当日、原発近くの建設現場にいた。1号機が水素爆発した翌12日、上司から「危ないらしい」と連絡を受けて関東地方の自宅にいったん帰ったが、13日、その上司が「とにかく行ってくれ」と原発に戻るよう要請。妻と2人の幼い子供を残し、北に向かった。

「やんなきゃ、やんなきゃ、としか考えていなかった」。がれきをかきわけながら、外部電源を原発につなぐための分電盤を運んだ。1時間の作業だけで、被曝線量は8^{ひばく}ミシーベルトを超えていた。

無名でも、爆発が止められればよいと思ってきた。ただ今年5月、朝日新聞が「所長命令に違反」と報じたときは、東電社員のなかにも悔しがるといふ。

「吉田さんは本当にいい人だった。朝日新聞がどう報じようが訂正しようが、俺たちの功績も変わらない」。男性はいまも原発を離れることなく、除染作業の指揮に汗を流している。》

『週刊文春』（14.9.18）にも、——「朝日を読んで悔しさが湧いてきた」福島第一原発 吉田所長の戦友 涙の抗議——のタイトルで、原発所員の声が掲載されているが、本当は朝日がしなければならない取材なのである。

《「ふざけてる!」

記事を見た瞬間、その男性は、頭に血が上ったと振り返る。東京電力福島第一原発が危機的状況に陥った際に現場に留まり、後に「フクシマ・フィフティ」と海外からも賞賛された所員の一人である彼は、語気を強めてこう語る。

「吉田所長の命令に反して私たちが逃げ出した、と書いたも同然です。怒りが込み上げてきました…」

以上が冒頭部であり、関係者の証言に基づいて、当時の経過がこう再現されている。

《「前日の夕方、吉田所長が指示して2F（福島第二原発）と連絡を取り、最小限の対策要員を残し、2Fの体育館を退避場所にする準備が進められていました。15日朝の吉田所長の最初の指示は、『各班、最少人数を残して退避』で、『2Fへ退避』が所員の共通認識でした。そもそも、免震重要棟以外に放射線量の低い場所は構内になかった。朝日が書いた『第一原発構内での待機』という言葉は、退避が始まった後のものなのです」

約650名の所員はバス5台と乗用車数十台に分乗して出発した。残ったのは、吉田所長以下約70名。免震重要棟内は一気にガランとした。

冒頭の男性所員が語る。

「円卓中央に座っていた吉田所長が、突然、『さ、メシでも食うか』と言い出し、皆で非常食やお菓子を食べました。室内はサバサバした雰囲気になり、退避組が無事2Fに着いたと連絡が入った時、口々に良かったとの声が出たし、吉田所長は安堵した様子でした。もし命令違反だと思えば、『オレはそんなこと言ってねえ』と言い出したでしょう」

《前出の男性所員は、十数人の班長の一人として第一原発に残った。

「私が受けた指示は、『必要最小限の人員を残して退避してくれ』。退避先は当然2Fだと思っていた。すぐに、自分の班で残す人間と退避する人間を選びましたが、退避組の多くが『自分に残ります』と言い出した。交代要員を考えれば、退避する人間も重要。それを説得するのに、時間がかかったことを覚えています」

別の男性所員は、記事を読んだ時、何を書いているのか理解できなかった。

「記事を見ているうちに、悔しさが湧いてきました」

吉田所長が最初の退避指示を出した時、彼は高い放射線の下、屋外に出て給水用車に給油していた。男性は事前に班長と話し、残ることが決まっていた。

「死んじゃうのかな。残ることが決まった時、そう思いました」

取材中に記憶が蘇ってきたようで、男性は目にうっすらと涙を浮かべた。

「免震重要棟に戻った時には退避が始まっていましたが、誰もパニックにはなっていませんでした。自分が死ねば、次の要員が必要で、退避は当然だと思いました。もし彼らが命令に反して逃げ出したなら、パニックになり、2F以外に逃げた人も出てきたはずですが、そんな人はいなかった。2Fに退避した同僚は、その後『退避して、もどかしかった』と言っていました」

吉田所長は、震災8ヵ月後に食道ガンが見つかり、昨年7月に亡くなった。

〈後世に残すことがあるので、もう少し生きていたい〉

手術後の12年1月、吉田所長は東工大特任教授の二見常夫氏にこんなメールを送信した。二見氏は吉田所長の東電の先輩で、福島第一原発の所長も務めた。

「どれだけ過酷な状況下でも、人間は生身。睡眠も食事も必要だし、交代要員も必要。福島第一のことを知っていれば、早い段階で、第二を前線基地にして退避することは、ごく自然な判断だったと思います。」

朝日の記事は、吉田君の特定の言葉だけを取り上げて、解釈を誤ったと思います。吉田調書は重要な教訓です。適切な形で公開され、原発に止まらず、広く危機管理の問題として検証されることを期待しています」

誤報を垂れ流す朝日新聞にも、第三者による「事故調」が必要なのではないか。》